

高等学校地歴科における地理分野と歴史分野を融合した授業構想

学習開発コース (13220904) 加藤 学

これまでの高等学校学習指導要領では、地理と歴史の相互の関連を図る旨の文言があり、2009(平成21)年版では、その旨の文言が非常に増えている。その一方で、相互の関連を意識した授業実践の報告は非常に少ないという現状である。本研究は、地歴の融合を図る授業構想について、これまでの学習指導要領と先行研究を検討し、教職専門実習Ⅱでの実践を踏まえつつ、地歴融合を図った授業構想について考察する。

[キーワード] 地歴融合・連携 高等学校 地理歴史科

1 問題の所在と方法

高等学校で「地理歴史科」が導入されて約20年がたつ。2009年に告示された「高等学校学習指導要領:地理歴史編」では、地理と歴史の相互の関連をはかる旨の内容が増えた。山口(2011)は、「地理と歴史は深い関連を持ち、両者相まってはじめて現実の社会・地域の真の理解ができる」と論じ、地歴の相互関連の必要性を述べている。

しかし、地歴の関連に留意した授業実践の報告は少ない。寺尾(2012)は、高等学校の日本史教師という立場から「高等学校地歴・公民科担当教師の中にさえ、受験指導のために世界史、日本史、地理の一科目のみを単独履修させればよいと考え、地歴・公民科の他科目との連携に全く関心を示さない者もいる」と述べ、教員が相互を関連させるという意識が希薄であると指摘している。

本研究では、地歴の関連に関する先行研究の検討と筆者の実践報告を踏まえて、双方の関連を意識した単元構成・授業構想について考察する。

2 先行研究の検討

(1) 学習指導要領における地理と歴史の関連

過去の学習指導要領における地歴の関連の変遷については、藤田(2010)の研究がある。これによると、1960(昭和35)年版の指導要領には、歴史分野については、年表や歴史地図を用いての指導が求められ、地理分野については、歴史的条件による変化に注目させるように留意することが示されていた。1970(昭和45)年版においては、歴史分野では地理A・Bとの関連をはかることが明確に記され、地理分野についても社会環境や歴史的伝統に注目することが「目標」において述べら

れている。しかし、1978(昭和53)年版と1989(平成元)年版には、世界史にのみ地理との関連をはかる記述があるだけで、日本史と地理に地理的・歴史の見方に関する記述はない。1999(平成11)年版でそのような記述が見られるも、非常に少ない。

2009(平成21)年「高等学校学習指導要領:地理歴史編」には、各科目の目標の中に、地歴の関連を重視することが明記されている。また、各科目の「内容」及び「内容の取り扱い」では次のように示されている。

・世界史A 3.内容の取り扱い(1)ア

「基本的な事項・事柄を精選して指導内容を構成するとともに、各時代において世界と日本を関連づけること。また、地理的条件とも関連づけること。」

・世界史B「世界史Aに同じ」

・日本史A 3.内容の取り扱い(1)ア

「我が国の近現代の歴史について各時代の国際環境や地理的条件などと関連づけ、世界の中の日本という視点から考察させること。」

・日本史B 3.内容の取り扱い(1)ア

「我が国の歴史と文化について各時代の国際環境や地理的条件などと関連づけて、世界の中の日本という観点から考察させること。」

・地理A 2.内容(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察

「世界諸地域の生活・文化及び地球的課題について、地域性や歴史的背景を踏まえ考察し、現代世界の地理的認識を深めるとともに、地理的技能及び地理的な見方や考え方を身につけさせる。」

・地理B 3.内容(3)現代世界の地誌的考察 イ

「現代世界の諸地域を取り上げ、歴史的背景を踏まえて多面的・多角的に地域の変容や構造を考察し、それらの地域にみられる地域的特殊や地球的課題について理解させるとともに、地誌的に考察する方法を身につけさせる。」

以上のように、1970年版までは地歴関連の充実が謳われていたが、その後の3回の改訂において記述が減少し、現行のもので再び地歴関連の記述が大きく増えたということがわかる。

(2) 地歴の関連に関する研究と実践

表1は、地歴の関連に関する研究の一覧であり、それぞれの内容から筆者の判断で類型化した。これをもとに、研究動向を明らかにしたい。

まず、地歴の関連を科目設定の点から論じたものとして、山口(2008, 2011a, 2011b)の一連の研究が挙げられる。山口(2008)は、地理と歴史の総合科目の設定を理想とするも、現実的には地理、歴史のそれぞれにおいて授業時数の10%程度を地歴融合単元の時間にあて、それぞれの科目の立場から融合単元を積極的に開発するのが妥当であると述べている。

指導例の提示及び実践報告に関する文献数は、少ない。そのような中で、寺尾(2008)は日本史と地理の関連を考察し、交通や軍事などに内容を分類して、地図を利用した指導例を報告している。そして、「社会科は歴史=時間軸、地理=空間軸という座標軸(十字架)を基本として最終的に公民的資質を育成する目的がある」という考えを基調として、「日本史授業では文字や用語の理解だけではなく、概念把握や空間認識という視点からも理解させることが大切である」と主張している。また寺尾(2012)は、地名や歴史的景観を扱う実践や鳥瞰図を用いた実践が、歴史から地理にアプローチする重要な視点となると述べている。

歴史教育からみた地歴の関連という点では、環境問題を主題にした研究も見られる。深草(1995)は、世界史授業に環境問題を取り入れる論考を行っている。古代の諸文明の盛衰や生活様式の変化が気候変動に起因し、人類が気候変動に対応すべく森林破壊を繰り返したことを、古代から近代まで通史的に描いている。また、戸井田(2004)は、学習指導要領の文言である「歴史的思考力」を地歴相互の関係性に留意しながら論じている。戸井田は「地球の歴史には人為によらない「環境変化」

が常に起こっており、それが人々の接触・交流に多大な影響を及ぼしてきた」と述べている。

以上は、歴史教育の立場からの研究である。地理教育の立場からは以下のような研究がある。

斎藤(1997)は、近・現代史の教育の展開において、「地理教育に、時間軸を加え、とくに近・現代史をくみ込んだ地理教育の開発は、いわばその相乗効果によって教育効果をいっそう高めるものと思われる」と論じている。藤田(2008)は、斎藤の主張を踏まえて、戦後史の視点、特にEUと冷戦に焦点をあてた実践を行い、歴史的な視点を盛り込むことで、生徒の興味・関心を高めることができたと報告している。また藤田(2011)は、中学校社会科の地理分野で、季節風貿易を題材にした授業実践も行い、「自然地理と歴史を関連づけて考察できる有効な単元」としている。

今井(2012)は「地理教育が歴史教育の長所を取り入れるとすれば、それは人物であり、人物の生き様」であるとして、東西ドイツの分断と統一を事例に、人物を教材にした実践を報告している。

3 実践と結果

(1) 教職専門実習における授業実践

ここで検討する実践は、山形県内のX高等学校にて行ったものである。担当学年は1学年の3クラスで、科目は世界史A、単元は「ウィーン体制とその動揺」と「ラテンアメリカの独立」である。授業は一斉授業で進めた。

「ウィーン体制とその動揺」では、ウィーン会議の組織や理念を説明したうえで、会議の結果、ウィーン議定書でヨーロッパ各国がどの地域を獲得・失ったかを、現代ヨーロッパの大型地図を提示して、それで確認しながら授業を進めた。

「ラテンアメリカ諸国の独立」も同様に黒板に大型地図を提示して、授業を進めた。地図は生徒達が持つ資料集とは別のものを、拡大して用いた。授業では、ウィーン体制動揺を示す一つの出来事として、ラテンアメリカの独立の意義を説明し、また、独立の中心人物の生い立ちや思想を説明した。ここでは、独立した地域を地図で確認するとともに、独立に関わった中心人物がラテンアメリカを移動したルートを書き入れながら、独立の過程を説明した。

表1 地歴関連に関する研究論文の一覧

	カリキュラム	科目設定	地理教育	歴史教育	学習材・教材	指導例	実践報告
朝倉(1972)			●(歴史的背景)				
今井(2010)					●(人物)	●(地)	○(東西ドイツ)
大岳(1994)			●(仏)				
今野(2013)				●	●(国旗)		○(国旗)
斎藤(1997)			●(近現代史)			●(地)	
志村(1998)	●(英)		●(カリキュラム)				
志村(2003)	●(英)		●(カリキュラム)				
志村(2008)	●(英)		●(主題図)		●		
志村(2012)			●(世界像構築)				
寺尾(2008)				●(十字架論)		●(歴)	
寺尾(2011)				●(地図利用)			
寺尾(2012)				●(地理的要素)	●	●(歴)	
戸井田(2004)				●(地理的見方)		●(歴)	
深草(1995)				●(環境問題)		●(歴)	
藤田(2008)			●(地誌)			●(地)	○(戦後史)
藤田(2010a)			●(地誌)				
藤田(2010b)	●(指導要領)						
藤田(2011)			●(自然地理)			●(地)	○(季節風)
古田(1996)				●(歴史地理学)			
宮崎(1996)				●(文明論)		●(歴)	
山口ら(2008)		●(地歴融合単元)					
山口(2008)		●(地歴連携)	●			●(地)	
山口(2011a)		●(歴史的要素)	●				
山口(2011b)		●(地歴連携)	●				
山田(1982)				●(地図・年表)	●(地図・年表)		

(2) 実践の結果

実践において地図を用いた結果、普段はあまり使われない教材であるため、生徒の反応からインパクトがあったことは見てとれた。しかし、扱う地図が適切ではなかったことがわかる。特にヨーロッパの地図に関しては「現代」の地図を用いたため国境線が当時のそれとは全く違い、また見えづらさもあったため、国の場所を漠然と指しているという状態であった。生徒が「ウィーン体制下のヨーロッパ」の位置関係をイメージできたかは難しい。その点「ラテンアメリカ諸国の独立」では、当時の地図を示すことができた。生徒が、地

図への書き込みを行っていたことから、幾分は生徒の反応が良かったように思える。

いずれにしても、地図を提示しただけになり、それを活用するまでには至らなかった。

4 考察

授業における地図利用を考えた時に、これまでの実践報告や実習を通して、扱う時代の当時の様子を表した「地図」を用いることが重要である。

また、地図の活用方法についても考えていかなければならない。筆者の実習に即していえば、ウィーン体制の授業で3つの地図を提示することができ

る。「革命前」「ナポレオン支配下」「ウィーン体制下」のそれぞれの地図である。その3つの地図からヨーロッパの位置関係の変化を読み取らせて、ウィーン体制の意義を理解させることができたのではないだろうか。変化を比較させることによって、複雑な位置関係をイメージしやすいものにしてきたのではないかと考えた。

地歴の関連をはかる上での観点もさらに考えなくてはならない。例えば自然環境（地形や気候）である。歴史におけるモノや人の移動を扱う場合、その一つの要因として、おおいに重要になるだろう。他にも距離、植生など様々な観点をおさえた上で、関連を図ることが必要と考えられる。

5 到達点と課題

本研究では、学習指導要領の変遷や研究動向から、地歴の関連を留意する内容の明記や相互の関連に関する研究があったにも関わらず、実践報告が少ないのが現状であることがわかった。

今後の課題としては、引き続きこれまでの研究の動向を調べていく必要がある。また、今回の実習の再検討とともに、教材開発や内容の設定を含めて、どのように地歴の関連を意識した単元設定を行うべきかを、具体的に検討する必要がある。特に今回の実践のような「単発」の授業に終始するのではなく、複数時間の中で行える授業構想を検討することが課題と言えよう。

さらに実践については生徒へのアンケート調査も行うべきである。今回の実践では行っていないので、客観的な授業の分析が行えなかった。この点も今後の課題である。

引用・参考文献

- 朝倉福温「世界史と地史の接点」、『地理』, 17 巻 1 号, pp. 174-180, 古今書院, 1972
- 今井英文「高等学校地理における東ドイツの分断と統一に関する授業実践-人物に着目して-」、『地理教育研究』6 号, pp. 33-37, 全国地理教育学会学会事務局編, 2010
- 藤田晋「戦後史の視点を取り入れたヨーロッパ地誌の授業展開」、『学芸地理』, 63 号, pp. 34-44, 東京学芸大学, 2008
- 藤田晋「地歴連携のありかたを学習指導要領から考える」、『地理』, 55 巻, 11 号, pp. 23-29, 古今書院, 2010
- 藤田晋「自然地理と歴史を関連づける授業実践 季節風を題材として」、『地理教育研究』, 第 8 号 pp. 54-58, 全国地理教育学会学会事務局, 2011
- 深草正博「日本史教育に環境問題を導入するために」、『皇学館大学紀要』, 第 37 巻, pp. 26-68, 皇学館大学, 1998
- 古田悦造「地理歴史科の発足と歴史地理学」、『東京学芸大学紀要 第 3 部門』, 第 47 号, pp. 125-138, 東京学芸大学, 1996
- 宮崎正勝「文明の構造空間と都市のネットワーク グローバル・ヒストリーにむけての一考察」、『北海道教育大学紀要第一部 C 教育科学編』, 第 46 巻 2 号, pp. 159-170 北海道教育大学, 1996
- 文部科学省「高等学校学習指導要領 地理歴史編」, 教育出版, 2009
- 寺尾隆雄「日本史授業の中の地図利用日本史と地理の接点を考える」、『地理教育研究』, 第 1 号, pp. 74-78 2008
- 寺尾隆雄「地歴連携を意識した日本史授業の展開」、『新地理』, 第 59 巻, 2 号, pp. 88-92, 日本地理教育学会編, 2011
- 寺尾隆雄「日本史教育と地理教育の連携の成果と今後の方向性」、『新地理』, 第 60 巻, 第 1 号, pp. 47-51, 日本地理教育学会編, 2012
- 戸井田克己「歴史的思考力の基礎概念としての地理的見方・考え方：世界史前近代の認識形成を中心に」、『社会科教育研究』, 90 号, pp. 22-33, 日本社会教育学会編, 2004
- 斎藤毅「地理教育による近・現代史の展開に関する一試論」、『東京学芸大学紀要 第 3 部門』, 第 48 号, pp. 245-250, 東京学芸大学, 1997
- 山口幸雄「高校地理歴史科における地理と歴史の関連・融合について」、『学術の動向』, 第 13 号, 10 号, pp. 38-42, 財団法人日本学術協力財団, 2008
- 山口幸雄「地理教育における歴史的要素の扱いに関する考察 歴史地理時代の到来か」、『地理教育研究』, 8 号, pp. 1-8, 全国地理教育学会学会事務局, 2011a
- 山口幸雄「高校地理教育の改善方向と地歴連携の在り方」、『学術の動向』 第 16 巻 9 号, pp. 16-21 財団法人日本学術協力財団, 2011b
- 山田裕幸「高校世界史における地図・年表の利用について」、『月刊歴史教育』, 4 号, pp. 113-117, 1982